

地名の由来と史跡と文化財

(加茂高滝地区編)



高瀧神社

上総の国いちはらの歴史を知る会

(ふるさと市原をつなぐ連絡会会員)

令和3年4月編集・製作

まえがき

人類は、今から700万年前にアフリカ大陸でサル類（チンパンジー）から枝分かれして「二足歩行の人類」となった。その後徐々に進化し約10万年前に一部の人類がアフリカを出ていくつかの人種に変化し大陸に住み着きました。

旧石器時代（先土器時代・無土器時代）～紀元前1万4千年前頃、我が国にも大陸から渡り来て住み着いたと思われます。その頃の日本列島はユーラシア大陸と地続きであり、彼らはマンモスやナウマン象、大角鹿などの大型動物を追いかけて日本列島にやってきた。食料調達には、主に狩猟や採取を行い、石を打ち砕いて造られた打製石器を使用した。食器などはなかった。

私たちの住みます「いちはら」にも人が住み始めて3万年の歳月が過ぎ、いくつかの大規模な集落が出来てきました。そして弥生時代になると大陸から稲作が持ち込まれ、肥沃な土地では稲作が行われるようになり、権力者による統治が始まった頃と思われます。その中で、大変興味深い説があります。縄文時代の頃に、日本列島に太平洋南方より現ポリネシア語（マオリ語）を話す民族が渡来し、住み着いた人たちが初めて地名を付けたという説です。それらの古い時代に付けられた今とあまり変わらない発音で、今も多く使われています。その中でも「古事記」や「日本書紀」などの古典や日本語の中にも、多くの現ポリネシア語源の言葉を見ることができますが、文字で表すものはありませんでした。

しかし弥生時代になると朝鮮半島より渡来した人により漢字が伝わって来て、今まで言葉で伝えられていた呼び方に、適当な漢字を当てはめたものです。例えば、日本の象徴の山「富士山」は、マオリ語では「フチ（HUTI）」「引き上げられた山、または釣り上げられた山」という意味となります。そして、浅間神社は熊野神社と並び最古の部類の神社と思われませんが、富士山の神を祀る「式内富知（ふち）神社」が最も古い神社と思われま

す。縄文時代には、争いごとは少なかったと言われていたのですが、水稻耕作が始まった弥生時代になると「定住民」が増えることにより、土地の利権争いが起き、古くから住んでいた縄文人は弥生人に圧倒されることになった。但し、古くからあった地名すべてが「現ポリネシア語（マオリ語）」という訳ではありません。

北海道には「アイヌ民族」のアイヌ語があり、沖縄には「琉球民族」が話す「琉球語」が存在する。

また、それぞれの地方には「方言」があり、その地方特有の言葉があります。

参考ですが、古来より「サ」が付いた名には「神様」に関係したものが多く見られます。

例えば、神社の敷地内は「境内（ケイダイ）」という聖域と一般の地を分ける「さかいめ」があり、神様が山から「さと（里）」に下ってくる道を「さか（坂）」と言います。また、祀りの際の神様の貴賓席を「さじき」と呼び、庶民は地面の芝に座ったので「芝居」という言葉が生まれたと言われています。

今回は、上総国市原郡内の中央部に位置します「加茂高滝地区」の地名の由来と、その地にある史跡や文化財などを紹介します。



市原郡内の高滝地区の地名の由来

千葉県の名の由来

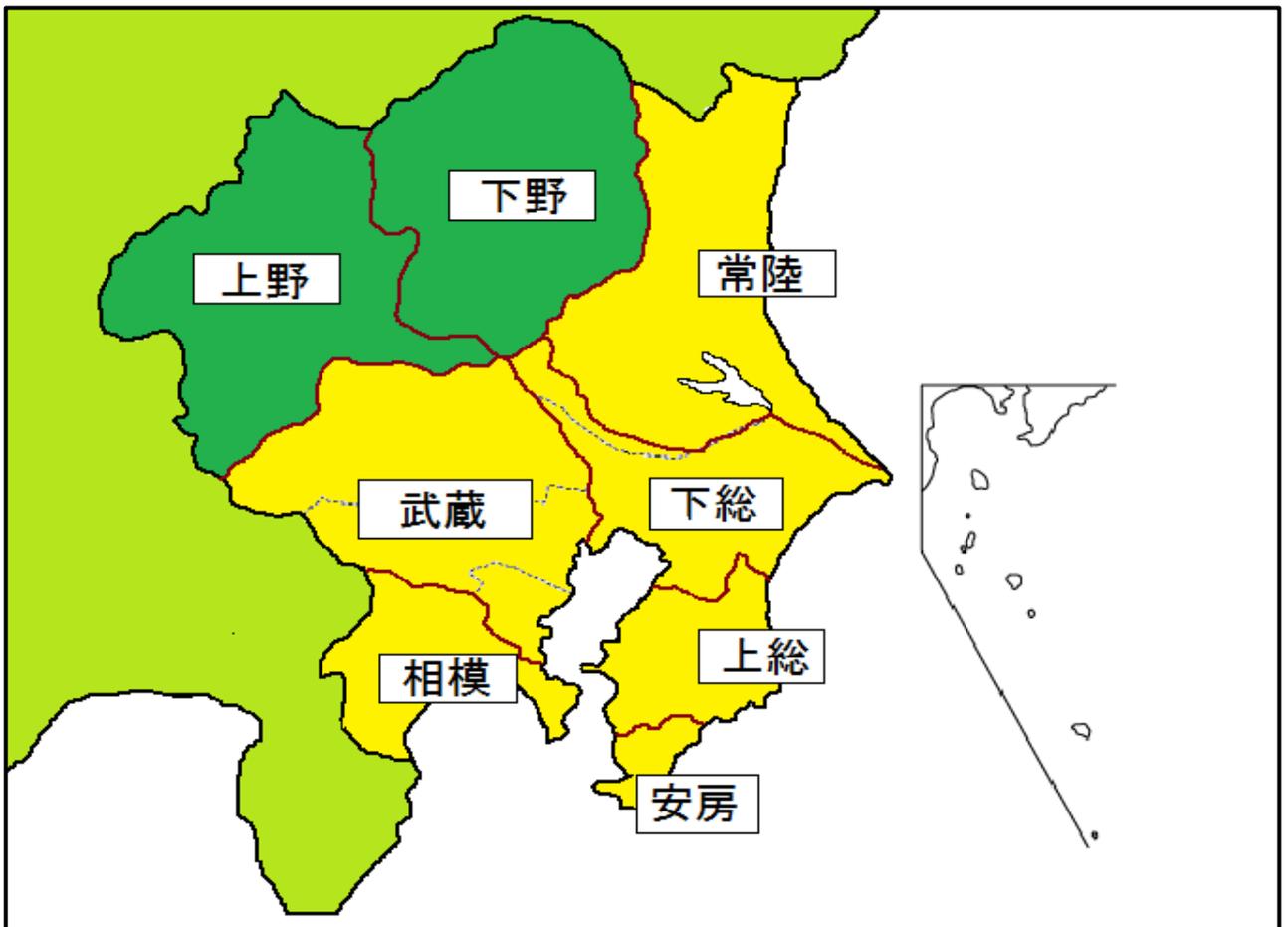
千葉県は江戸期までは総国（ふさのくに）と呼ばれており、茨城県南西部の一部と埼玉県東部の一部も含まれていました。この地域は7世紀後半の令制国の建置により、上総国と下総国が成立しその後養老2年（718年）に上総国から4郡が分かれ安房国が誕生した。

「総」の語源は、「古語拾遺」によると、「天富命（あまとみのみこと）」が安房国から齊部氏を率いて東上し、麻を植えたところ、良い麻が生えたので、総（麻）の国としたという説と、「風土記逸分」によると「総」とは木の枝を言い、昔この国に大きな数百丈のクスの木が生えていたが、大凶事との占いが出たので切り倒したところ、南に倒れたので、上の枝を「上総」と言い、下の枝を「下総」と言ったと記されているが、いずれも根拠が弱く、他にも「塞ぐ」からで「山などが周囲にある土地」や「ふし」の転訛で「高い所」の意味する説などがあるが、現在では朝廷の都に近いほうが上であり「上総」と付けられたという説が正しいと考えられる。

なお、「ふさ」はマオリ語で「フ・タ」で、「浸食された丘陵がある地域」の転訛と訳します。

「和名抄」に、下総国相馬郡布佐（ふさ）郷があり、現我孫子市東端の布佐の地域と思われる。上総国には、市原（国府所在地）・海上・畔蒜（あびる）・望陀（ぼうだ）・周准（すえ）・天羽・夷隅・埴生・長柄・山辺・武射の11郡がある。

下総国には、葛飾・千葉・印旛・埴生・匝瑳・海上・香取・相馬・猿島（さしま）・結城・豊田の11郡が、安房国には、平群（へぐり）安房・朝夷（あさひな）・長狭の4郡で国造りがされた。市原郡は「伊知波良」と書き、中世には市西郡と市東郡に別れ、山田郡も郡域内にあったと思われます。国府の所在郡でもあり郡内には、海部（あま）郷・市原郷・湿津郷・江田郷・菊麻郷・山田郷の6郷があった。江戸期には、このほかに、海北郷・佐是郷など、旧海上郡域も併合された。



市原郡内地名の由来と神社、仏閣、史跡、文化財の紹介

※ アンダーライン部は、古代マリオ後（現ポリネシア語）での表現を日本語に転化したもの。

上総国市原郡の6郷

1・海部郷（あまのごう）

平安期にあった郷で、高山寺本の訓は「安万」東急本は「阿万」と呼ばれており、海士有木に比定されている。漁業、航海を中心とした職業的品部に由来する地名。

2・市原郷（いちはらごう）

平安期にあった郷で、市原・能満・門前・郡本付近に比定されている。地名の「イチ」は集落の意味、または「稜威」（いつ）の転嫁で美称か。櫟（いちい）の繁茂する原野の意味とする説もある。

※藤井は、万治2年（1659年）に郡本より分村したのと、山田橋は元は山田郷に属していたので、市原郷には含まれなかった。

3・湿津郷（うるつごう）

平安期にあった郷で、高山寺本の訓は「宇流比豆」、東急本では「宇留比豆」。市原市潤井戸付近に比定される。地名の由来は、「ウルヒ（湿）・ツ（場所）」と考えられる。村田川の上流で、豊富な湧泉があることから命名された地名と思われる。

4・江田郷（えだごう）

奈良期にあった郷で、高山寺本・東急本ともに訓は「衣多」。市原市吉沢付近は古くは江田郷と称したと伝えられ、当郷の比定と思われる。他に、市原市八幡付や市原市江古田などを含む養老川上流右岸の広大な地域を郷域としている。

5・菊麻郷（くくまごう）

平安期にあった郷で、東急本では「菓麻」と書く。訓は、高柳寺本・東急本ともに（久々万）。

市原市菊間付近に比定されている。地名の由来は、「くくまった（包み込まれたような）・地」の意味

6・山田豪（やまだごう）

平安期にあった郷で、東急本の訓は「夜万多」。市原市山田付近に比定されている。

地名の由来は、「山を開いて田を作ったところ」の意味か、「山間の田」あるいは「山処（やまど）」の転嫁で、「山のある処」とも考えられる。

高滝地区（大和田・久保・駒込・高滝・外部田・不入・本郷・山口・養老）

概説

ニニギノミコト・タマヨリヒメノミコト・ワケイカズチノミコトを祭神とする「高瀧神社」は、三代実録によれば貞観10年（868年）に従5位下を授けられており、現在でも祭礼などを通じて地域のシンボルである。ニニギノミコトは、日と稲穂を意味する神であることから、農耕に必要な水（或いは滝）の神と雨をもたらす雷の神（ワケイカズチノミコト）を祀り、ワケイカズチノミコトの母タマヨリノミコトを合祀し、五穀豊穡を祈ったものであろう。

平安時代末期（980年）には天台宗壇郡流派が音信山（山口）に霊場を構え、鎌倉時代にかけて光明寺（現在は池和田に移転）などの寺院が立ち並び、隆盛したと伝えられている。

鎌倉時代には、熊野信仰が盛んとなり当地にもその影響が見られ、同時代の仏教説話「沙石集」は高滝の地頭が娘を連れて熊野詣をしたことが記されている。

戦国時代末期の天正16年～18年（1588年～1590年）には、里見氏領、それ以前は真里谷武田氏か里見氏のいずれかの勢力下にあったものと思われる。

江戸時代初めの幕府領となった村に山口、加茂があり、慶長7年（1602年）から外部田・山口・駒込大作・久保の各村を除いては久留里藩土屋氏の領地となったが、転封後は幕府領、旗本知行に分割された。なお天和3年（1683年）板倉重宣が高滝周辺等2万石を領して高滝藩を立藩している。しかし元禄12年（1699年）に子の重高の時、備中庭瀬に移封しているので、わずか16年間であった。

明治元年には、一時宮谷県所轄となったものの、同年12月に鶴舞藩井上氏の領地となった。明治4年鶴舞県が廃止され、木更津県所轄となり、同6年千葉県所轄となった。同年、区制のもと、旧幸田郷（久保・外部田・駒込・山口）は第5大区5小区に、旧高滝郷は第5大区6小区に編入された。不入は古敷谷と共に第5大区13小区であった。明治8年北埼玉村と小佐貫村が合併して養老村となり、明治9年宮原村と加茂村が合併して高滝村と称した。その後も3つの戸長役場（小区）に分かれたまま諸村は何度か合併したものの、現在の区域による高滝村が誕生したのは明治22年の町村制施行によるものです。

昭和29年には加茂村となり、昭和42年に市原市と合併した。

明治9年から着手、明治15年に完成した農業用水路（通称高滝溝梁）や藤原式陽水機などを利用して新田開発を行うなど、明治期の高滝村には進取の気風と活気が溢れていたようです。中でも明治22年以降の高滝村となってからは、久保に隔離病舎（明治33年開設）を設け、また久保長光寺境内に綜種館という名称の図書館を設けるなど、地域の中心として近代化に向けて努力していったことは特記される。



大和田（おおわだ） 神社・寺院・史跡文化財・城址 光厳寺（真言宗豊山派）・
両界大日如来坐像・不動明王坐像

江戸期は大和田村。地名の由来は、「おお（美称）・わだ（輪処）」で、台地が弧を描くように低地に連なっている地勢を指したもの。

泰長山東光院光厳寺（たいちょうさんとうこういんこうげんじ） 真言宗豊山派

所在地 市原市大和田380番地

創建時期 建武2年（1335年）

本尊 金胎不動明王坐像

住職 坂元 敦子

由緒・伝説 光厳寺は、建武2年（1335年）に創建され、法印良秀師が延宝8年（1680年）に中興開山した。近隣に末寺9ヶ寺を擁する本寺格の寺院だったと言われる。

明治維新まで高滝神社の別当寺を勤めていた。

本寺の所蔵物に両界大日如来坐像・不動明王坐像並びに本堂欄間彫刻があり、市原市指定の文化財となっている。

両界大日如来坐像（りょうかいだいにちによらいざぞう） 市原市指定文化財

所在地 市原市大和田380番地

所有者 光厳寺所蔵

種類 彫刻物

説明 金剛界・胎蔵界の両界を一對で表した珍しい作例です。金剛界大日如来像は像高104cm 智拳印を結び、五智宝冠を戴いて、袈裟跏趺座しています。胎蔵界大日如来像は像高105cmで、智と理の統一を象徴するという法界定印を結び、胎蔵界五智如来の小像を飾った銅製の宝冠を戴いています。南北朝時代頃の端然とした本格的密教像として注目される。（いちほら歴史の旅人の解説文を引用）



不動明王坐像（ふどうみょうおうざぞう） 市原市指定文化財

所在地 市原市大和田380番地

所有者 光厳寺所蔵

種類 彫刻物

説明 憤怒形を表す不動明王は、密教において大日如来の意を奉じ、衆生の煩惱を打ち砕く役目をしている。像高88cmの木像寄木造りで、彩色は失われていますが、眼に水晶製の玉眼をはめています。

辨髪を垂れ、右手に煩惱を断ち切る宝剣、左手に衆生を助け揚げるための網を持ち、背後にカルラ炎を負います。左眼をやや閉じた天地眼とします。

また、胎内には願文と胎内仏を蔵しています。両界大日如来坐像と共に安置されています。室町時代の作と思われる。（いちほら歴史の旅人の解説文を引用）



光厳寺本堂の欄間彫刻 (市原市指定文化財)

所在地 市原市大和田380番地

所有者 光厳寺所有

種類 彫刻物

説明 本堂正面に取りつけられた欄間彫刻は、三面で構成されている。

中央の「波の龍」は、波間に身を躍らせて宝珠を握る龍の姿が立体的に彫られています。龍の口内には赤彩が残り、保存状態は良好です。「波の龍」の左右には人物像の欄間が配置されており、向かって左側の経巻を持っている人物が「寒山」、向かって右側の箒(ほうき)を足元に置く人物が「拾得」です。二人は中国の唐代の詩僧です。

中央の欄間の裏側に銘が刻まれており、江戸時代の彫物大工「武志伊八信由(初代伊八)」によって彫られたものであることが分かりました。初代の武志伊八信由は、その技量に優れ中でも迫力のある波の彫刻は伊八の作品の特徴で、この為「波の伊八」と呼ばれています。

(市原市教育委員会掲示解説文より引用)



久保（くぼ） 神社・寺院・史跡文化財・城址 八坂神社・三社神社・神明神社・熊野神社・雷神社
長光寺（天台宗）・光林寺（曹洞宗）

江戸期は久保村。古くは当地を「くのう」と呼んだとも言い、地内に久能（くの）、久能向（くのうむかえ）の小字がある。地名の由来は「くぬ（くさぬぎの縮語）・う（～になっている所）」の転訛で、山崩れした所と言う意味。

八坂神社（やさかじんじゃ）

所在地 市原市久保字熊ノ谷1289番地
 創建時期 不詳
 祭神 素盞鳴命
 宮司 平田 常義
 由緒・伝説 旧村社。創建年代、由緒不詳

八坂神社の本殿の建物



境内入口の鳥居・奥に三山供養石碑



本殿入口に掲げられる扁額



文化3年に建てられた石燈籠

三社神社（さんしゃじんじゃ）

所在地 市原市久保字三社295番地
 創建時期 不詳
 祭神 伊弉諾命・伊弉册命・大日靈貴尊
 宮司 平田 常義
 由緒・伝説 創建時期、由緒不詳

三社神社の本殿建物



神社境内入口の鳥居、奥に社



三社の祭神を祀る祭壇



明治14年に奉納された石燈籠

神明神社 (しんめいじんじゃ)

所在地 市原市久保字神明台436番地
創建時期 不詳
祭神 大日靈貴尊
宮司 平田 常義
由緒・伝説 創建年代、由緒不詳

神明神社の本殿の建物



境内入口の鳥居



本殿の右側を撮影



本殿右脇にある小さな祠

熊野神社 (くまのじんじゃ)

所在地 市原市久保字新熊ノ谷1148番地
創建時期 不詳
祭神 事解男命 神紋 二葉葵
宮司 平田 常義
由緒・伝説 創建年代、由緒不詳。扁額に特殊な「熊野」の文字が使われている。

熊野神社の本殿の建物



参道の石段と鳥居。足元注意



本殿正面の入口の篇額は見えない



本殿内部に祀られる祭壇

雷神社 (らいじんじゃ)

所在地 市原市久保1312番地
創建時期 不詳
祭神 大雷神
宮司 平田 常義
由緒・伝説 創建時期・由緒不詳。近年の風水害で鳥居、本殿倒壊状態。参道もなし。

本殿建物、鳥居も破損し建物まで行けない状態



萬福山長光寺 (まんふくさんちょうこうじ) 天台宗

所在地 市原市久保796番地1

創建時期 江戸中期頃か(墓石により)

本尊 地藏菩薩

住職 吉野 堯慶

由緒・伝説 明治44年に近隣の天台宗5寺院がまとまり長光寺となり、現在に至る。

長光寺の本堂正面



長光寺の境内入口



江戸時代中期の墓石も並ぶ

観音様を刻まられている石碑



駒込 (こまごめ) 神社・寺院・史跡文化財・城址 神明神社・

江戸期は駒込村。地名の由来は、「こま(川の曲流)・こみ(浸水地)」の転訛で、養老川が蛇行している水害に遭いやすい地と言う意味。

神明神社 (しんめいじんじゃ)

所在地 市原市駒込字神明前109番地1

創建時期 不詳

祭神 大日靈貴命

宮司 平田 常義

由緒・伝説 旧村社。創建年代、由緒不詳。境内に道祖神(猿田彦命)・子安神社(木花開耶姫命) 疱瘡神(大己貴命)・虫神(日本武尊)が祀られる。

駒込神明神社の本殿



境内入口の石の鳥居と階段



本殿入口に掲げられる扁額



本殿脇にある祠。祭神は不明



本殿右前の手水鉢



浅間大神の石の祠



出羽三山信仰の供養塚

高滝 (たかたき) 神社・寺院・史跡文化財・城址 高瀧神社 (市指定文化財)

・高瀧神社の森 (県指定文化財)

鎌倉期は高滝郷。江戸期は加茂村。明治7年(1874年)に宮原村と加茂村が合併し高滝村となった。地名の由来は、当地に鎮座する高瀧神社にちなむ。同神社は、天武天皇元年(672年)に高瀧の神号を賜ったという。「たき(滝)・たき(滾)」の転訛で、養老川が激しく流れる崖地・急傾斜地・浸食地と言う意味。過去に度々水害にあった地であり、水害を鎮めるために古くから高滝神が祀られたと言う。

高瀧神社 (たかたきじんじゃ) 市指定文化財 (建築物)

所在地 市原市高滝字加茂1番地

創建時期 白鳳2年(673年)に山城国賀茂の両社を分祀され、高滝神と号したという。

祭神 瓊瓊杵尊・玉依姫尊・別雷尊

神紋 二葉葵

宮司 平田 常義

由緒・伝説 男千木。旧県社、国史現在社。貞観10年(866年)に従五位下に昇叙されている。



朱塗りが鮮やかな高瀧神社の本殿正面

白鳳2年(673年)山城国賀茂の両社を分祀、高瀧神と号した。もとは夷隅郡大多喜町粟又字高滝に鎮座していたという。承安年間(1171年~1175年)に山城国加茂社を合祀。加茂神は、五井海岸に流れ来たり養老川を遡り夷隅川老川村粟又に鎮座したが、土地が狭く発展しないと見切りをつけ朝生原字上の山に鎮座した。再びこの地に見切りをつけ高滝にあった社に合祀したという。天文3年(1534年)久留鯉城主・里見刑部天正19年(1591年)徳川家康の寄進があったと伝えられる。

地名は、養老川が激しく流れる急傾斜地と言う意味で、過去に度々水害にあった地であることから、水害を鎮めるために古くから高滝神が祀られたと考えられる。神木に柳。

境内に松尾神社、(大山咋命:白鳳2年)・神明宮(天照皇大神)・八坂神社(須佐之男命)・稲荷神社(稲倉魂命)大己貴神社(大己貴命)・竈大神(奥津彦命・奥津姫命)・猿田彦神社二社(猿田彦命)・道祖神(猿田彦命)・白鳥神社(日本武尊)・金刀比羅神社(崇徳院天皇:大正3年一社(不明)を合祀)日精神社(大日靈貴命)がある。



高瀧神社拝殿正面と扁額



拝殿内部の祭壇



市指定文化財の拝殿・幣殿・本殿



拝殿内に安置される神輿



市指定文化財の末社合祀社殿



以前の社務所の建物

高瀧神社社殿附末社社殿（市指定文化財）

所在地 市原市高滝1番地

所有者 高瀧神社

種類 建築物

説明 「日本三代実録（901年撰集）」にも名を残す古社で、享保12年（1727年）に建立された社殿は本殿・幣殿・拝殿により成立つ権現造りで、本殿は正面3間、側面2間の三間社流造、屋根は銅板葺きで庇部分に階段と高欄を付設している。拝殿は、正面7間側面3間の銅板葺き屋根の入母屋造です。
末社社殿は、正面10間、側面1間で、屋根は銅板葺き。県内に類例を見ない様式の合祀社殿です。

高瀧神社の森（県指定文化財）

所在地 市原市高滝1番地・2番地1～2

所有者 高瀧神社

種類 天然記念物

説明 原始の植生を伝える神の森
約16,000㎡に及ぶ高瀧神社社域を覆い、島状の独立丘陵上に発達した杜。閉鎖的な森林生態を示し、暖帯林の特徴を持つ自然林が尾根伝いにまとまっています。

尾根の北面には樹高20mを越える巨木のほか、クリ・クヌギなど落葉広葉樹が繁茂。アラカシ・ヒイラギなどの常緑広葉樹も混生している。また、南面はシダが多く、タビノキ・アラカシ・ウラジロガシ・サカキなどが混生し、自然林の植生をよく示している。



外部田 (とのべた) 神社・寺院・史跡文化財・城址 山王大権現 (日精神社)・

江戸期は、外部田村。地名の由来は、「と(山)・の(接続詞)・へた(辺処)」で、丘陵沿いの土地を意味する。

山王大権現 (さんのうだいごんげん)

所在地 市原市外部田字室台90番地

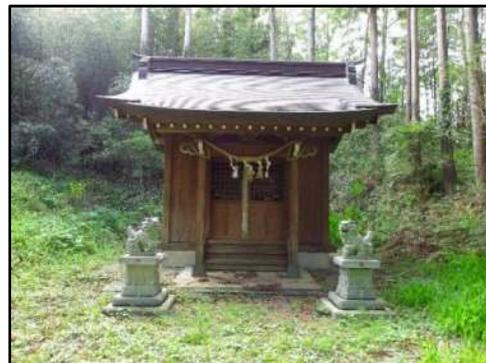
創建時期 不詳

祭神 不詳

宮司 平田 常義

由緒・伝説 創建時期・由緒不詳

山中に鎮座する本殿社



境内入口に立つ鳥居



本殿入口の上の神社扁額



金刀比羅神社の石の祠

不入 (ふにゅう) 神社・寺院・史跡文化財・城址 詞具都智神社・

江戸期は不入村。北部の大和田と久保の間の新谷永田は当村の飛び地。

地名の由来は、荘園の不入の権利(田の面積を調査する役人の立ち入りを拒む権利)を与えられた土地。

愛宕神社 (あたごじんじゃ) 詞都具地神社 (かとぐちじんじゃ)

所在地 市原市不入字堀込190番地

創建時期 不詳

祭神 詞具都智命

宮司 平田 常義

由緒 創建年代・由緒不詳。もとは詞都具智神社

不入愛宕神社の本殿



参道入り口に立つ石の鳥居



入口の詞都具智神社の扁額



文化9年に奉納された石燈籠

本郷（ほんごう） 神社・寺院・史跡文化財・城址 天満神社（三峯神社）・八坂神社・大宮神社
 西光寺（曹洞宗）・大羽根城址・本郷明金城址
 江戸期は本郷村。地名の由来は、組合ⅠⅠ村の親村であったことによる。

三峯神社（みつみねじんじゃ）（天満神社）
 所在地 市原市本郷字天神台407番地
 創建時期 不詳
 祭神 菅原 道真公
 宮司 平田 常義
 由緒・伝説 創建年代・由緒不詳。
 境内に天満神社が祀られる。

三峯神社と天満神社の祠



両神社の入口の鳥居



巨木のもとに祠が鎮座される



出羽三山信仰の供養塚

八坂神社（やさかじんじゃ）
 所在地 市原市本郷1469番地1
 創建時期 不詳
 祭神 素戔鳴尊
 宮司 平田 常義
 由緒・伝説 創建時期・由緒不詳

八坂神社の社



社前に立つ鳥居

本殿社を左側から写す



紫雲山西光寺 (しうんさんさいこうじ) 曹洞宗

所在地 市原市本郷543番地

創建時期 延宝元年(1637年)

本尊 不詳

住職 牧山 真美

由緒・伝説 西光寺は、蔵山玄智大和尚により、延宝元年に創建され、330年以上の歴史を持つ古刹です。

銅板葺きの西光寺本堂



本堂は、明治6年の小学校令に従い、明治7年より小学校として寺子屋授業を始めたが、明治7年12月25日夜に火災により本堂と庫裡を全焼した。再建協議の結果、曹洞宗常盤寺本堂を解体し、明治12年に現在の地に建立された。昭和4年に茅葺き屋根からトタン葺き屋根に改修され、更に昭和46年に瓦トタン葺き屋根に改修されたが、トタンの錆がひどくなり、雨漏りの心配も出て、西光寺三百周年の記念事業として、銅板葺き屋根に改修となった。(改修の説明石碑の文を引用)



西光寺境内入口の寺標の石柱



西光寺の正面入口と表札



本堂の改修事業の説明石碑

大羽根城址 (おおはねじょう)

所在地 市原市本郷字大羽根1700番地付近

築城時期 中世天正年間(1573年~1591年)頃

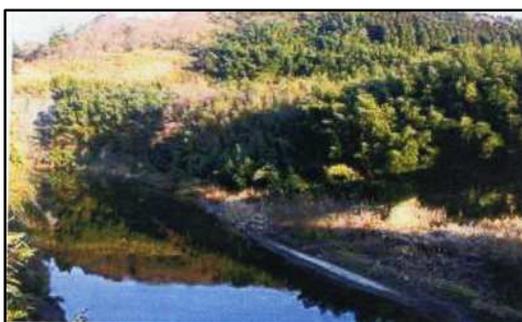
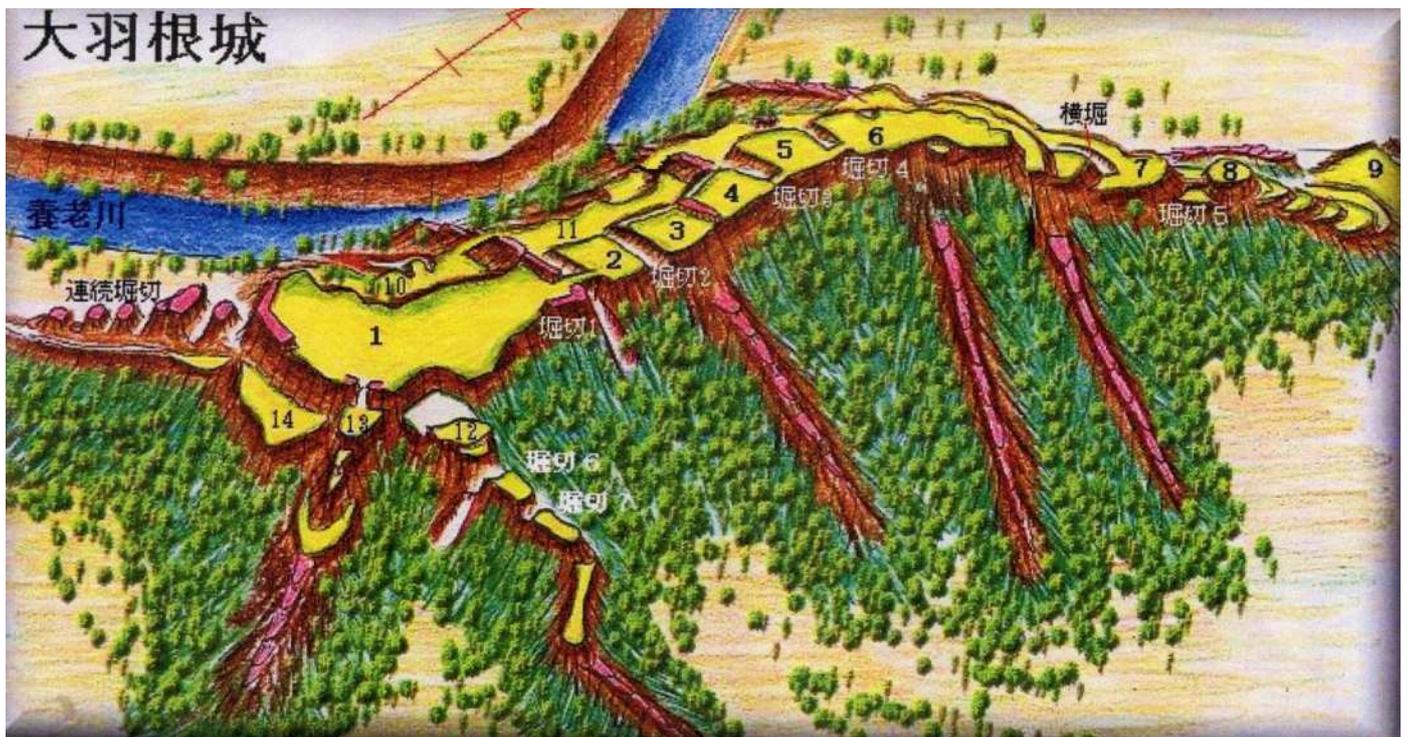
築城主 里見氏

説明 大羽根城は音羽根城とも言い、歴史や城主等は不明ですが、地元の伝承では、千葉氏に備えて築いた城だと言われている。城の規模や構造から、天正年間の里見氏の城で間違っていない。天正初期には、北条氏が椎津城番(市原市)や久保田城番(袖ヶ浦市)として、千葉氏配下の原氏などが派遣されているので、それらの勢力に備える城と言う。高滝湖の近くの里見駅や里見小学校などがあり、里見氏に関する伝承がこの地域で息づいている。大羽根城は、高滝湖に注ぐ養老川のすぐ東側の比高60m程の台地上にある、究極の要害地にある。城は、基本的に細長い尾根を連郭式に区画した構造です。特に、南側の台地基部との間の細尾根部分に置かれた連続堀切は、4~6mほどの間隔で置かれているので側面から見ると幾つもの塚が並んだように見え、「ラクダのコブ状阻壘」と名付けたい。連続堀切の底から高さ8m程の城壘の上に1郭がある。80m×20mほどの湾曲した郭です。南側には高さ2mほどのかなりしっかりとした土塁がある。西下には、10の腰曲輪があり、ここには2本の連続した堅堀が見られる。この堅堀は直下で合流して1本になっている。東下には、2本の尾根があり、この内の13の所から1郭に上がる虎口状

の窪みがある。この13から下は峰が下がってやや広い郭に出るが、進入路は見られない。一方隣の12の郭から先は、堀切が2本あり、段差のある城塁も続いており、こちら側からの導入が配慮されているので、12の所から13の所へ導き、そして虎口に上がるといいう通路となっていると思われる。1郭の北側には、土塁と土橋による虎口が見られる。この先から20m四方程度の小郭が連続して配列されており、その間には堀切が掘られている。但し、3と4の郭との間にある土塁は高さ1m程度の低いものであり、この2つの郭は合わせて1つの郭とみるべきと思われる。堀切は段々規模が小さくなり、堀切4に至っては現状で深さ1m、幅3m程となっている。

6郭から先は、北側の先端に向かって地勢が段々と低くなっている。7の郭の所にはU字型の横堀の跡が見られるが、かなり埋まっているので、痕跡程度しか見られない。

8の郭は、物見台のように独立して高くなっているような形態です。ここから段々となっている所を降りてゆくと、100m程のある9の郭に出るが、後世に耕作地として開かれたとも思われる。(参考資料 小高 春雄氏の「市原の城」を使用)



大羽根橋から城址の台地を写す



深さ6m、幅8mの堀切1



ラクダのコブ状の1郭の土塁

本郷明金城址 (ほんごうめいきんじょう)

所在地 市原市本郷字明金

築城時期 中世 室町期と思われる。

築城主 不詳

説明 本郷明金城は、小湊鉄道「里見駅」の北側400m程の所にある、比高8mほどの低くて平坦な台地上にあった。城址は現在宅地や畑などになっているが、空堀、土塁、虎口、食い違い虎口などが残っている。城址のすぐ東に西光寺と言う寺院がある。西光寺の下から谷戸部を隔てて西側の台地部分は、城を築くには最もふさわしい場所と思われる、西端にある民家の敷地内には土塁のようなものも見られる。この台地上がって行く部分は虎口状になっている。また、台地西側の比高30mほどの山稜も城域内とおもわれる。



本郷堀ノ内館 (ほんごうほりのうちやかた)

所在地 市原市本郷字堀ノ内

築城時期 中世 室町期と思われる

築城主 不詳

説明 堀ノ内館は、西光寺の辺りにあったと思われる。現在では明確な遺構などは残っていないが、西光寺のある一帯を堀ノ内と呼んでおり、中世に城館が存在した可能性が非常に高い場所。西光寺のある場所は台地の南西端にあたり、南側の台地との間が道路により切り落とされており、堀切跡と思われる。また、西側の谷戸部にはかつて堀があったという。そのようなことから、西光寺のある辺りに城館があったと思われる。また、台地東側の高滝湖に面した部分も、周囲よりも一段高くなっており、北側の谷津がBの低い水田となって台地上切れ込んでおり、ここより東側の民家のある部分も城館を築くのにふさわしい地形となっており、ここにも城館に関連した建物があったとも思われる。

山口 (やまぐち) 神社・寺院・史跡文化財・城址 八坂神社・放光寺(天台宗)・山口城址

木造地蔵菩薩坐像(県指定文化財)

江戸期は山口村。地名の由来は、三重山の入口の意と言うが、「やまふち(山縁)」の転訛で、山裾の地と言う意味。

八坂神社 (やさかじんじゃ)

所在地 市原市山口字宮脇237番地
 創建時期 不詳
 祭神 素戔鳴尊
 宮司 平田 常義
 由緒・伝説 旧村社。創建年代、由緒不詳。大正2年(1913年)に熊野神社(字北大谷:事湧男命)を合祀している。

山口八坂神社の本殿の建物



参道入口の鳥居と参道・石段



左奥の本殿と手前は拝殿



拝殿の入口正面としめ縄



拝殿の内部。奥に祭壇が見える



本殿右外側に祀る小さな祠



市指定保護樹林のシイの巨木

日輪山放光寺 (にちりんさんほうこうじ) 天台宗

所在地 市原市山口735番地
 創建時期 不詳
 本尊 不詳
 住職 河邊 堯周
 由緒・伝説 不詳

放光寺の本堂正面





放光寺の本堂入口の扁額



本堂内部に飾られた祭壇



境内にある地藏様の石像群

山口地藏堂 (やまぐちじぞうどう)

所在地 市原市山口270番地1

創建時期 昭和37年11月

本尊 木造地藏菩薩坐像 (県指定文化財)

種類 彫刻物

所有者 音信山光明寺

説明 山口地藏堂は、かつて音信山光明寺の本尊

とされていた木造地藏菩薩坐像を守るために
光明寺が山口村に供養料を支払って安置した

地藏堂です。昭和37年に県の補助金と山口区民の協力を得て護持されています。

本尊の木造地藏菩薩坐像は、平安時代後期から鎌倉時代にかけて相次ぐ戦乱、天変地異、飢饉が相次ぎ、当時の人々は末法の世の到来と地獄に落ちる不安と恐怖に怯えていた。中でも戦陣における殺生罪による地獄への恐れと所領の安堵、一族の繁栄を最大の関心とする新興の武士階級にとって、誰でも差別なく地獄から救ってくれる地藏菩薩は最も頼りとする仏でありました。座高2,75mあり、木造地藏菩薩坐像で全国一大きいと言われる地藏尊で、音信山光明寺が音信山から池和田に移転する際に、養老川を渡して移動させることができず、当地に置いていったものと伝えられています。

この像を安置した元のお堂は、大正6年9月30日深夜の大暴風雨により倒壊し、その後三間×四間のお堂が再建されたが、屋根が茅葺き出手入れが行き届かず雨漏りがしていた。戦後昭和36年にあまりにも荒廃したお堂と地藏菩薩座像を守ろうとする機運が高まり、村長に相談し、県教育委員会に陳情しそれまで一割だった補助を五割に改正し、復元修理が行われた。県では、国宝修理員に修理を依頼し約一か年をかけて復元修理をし、その間に鉄筋コンクリートの保存庫も建設した。その後、台座のコンクリートのヒビ割れも修復などもおこなわれている。像は後世の手が加えられ面長になったという説もある。

造像当初は御躰の部分は金箔が張られ、衣の部分は彩色が施されており、大きく張った膝、ぐっと深く彫られた衣のひだが力感あふれる鎌倉時代後期の作品です。



県指定文化財の木造地藏菩薩坐像

山口城址 (やまぐちじょう)

所在地 市原市山口・養老

築城時期 中世期

築城主 不明

説明 山口城は、小湊鉄道高滝駅の北西900m、山口地区と養老地区にまたがった比高20m程の半島状態台地にあったと言われてい

ます。台地は、南北に長く連なっており、台地の下には長泉寺、八坂神社、地蔵菩薩堂などがある。台地上は山林化しているが、郭や土塁、空堀、虎口、井戸などが良く残っているという。山上部分は地形図で見ると基本的には尾根ばかりのようで、これが城館だとすると尾根によって囲まれた東側山麓の集落地帯に居館があったと思われ、いわゆる谷戸式城郭と思われる。鎌倉時代の説話「沙石集」には、高滝の地頭とその娘が熊野詣でをしたという話が掲載されている。このことからこの辺には古くからかなり有力な豪族が存在していたと考えられる。山口の地蔵を維持していたのはそのような人物と思われる。このような豪族の居館がこの辺りに存在していたものとするなら、山口城もあったと思われる。



地蔵堂の裏山一帯が山口城跡と言われる

養老 (ようろう) 神社・寺院・史跡文化財・城址 八坂神社・長泉寺 (曹洞宗)

明治8年(1875年)に起立。北埜村・小佐貫村が合併して成立。

地名の由来は、養老川が地内を囲むように流れていることにちなむとも、神代より一千年を経た「養老の松」と呼ばれていた古松があった事にちなむとも言われる。

八坂神社 (やさかじんじゃ)

所在地 市原市養老字原小谷27番地

養老自治会館の敷地内

創建時期 不詳

祭神 素戔鳴命

宮司 平田 常義

由緒・伝説 創建時期、由緒不詳。明治28年

(1895年)日精神社・奈良神社・

熊野神社の三社を合祀。大正7年(1918年)に三嶋神社(大山祇命)と境内社日精神社(大山祇命)を合祀。境内に子聖神社・鹿嶋神社(武甕槌命)・庚申神社(猿田彦命)があったが本殿に合祀。昭和15年に火災により全焼した。現在は養老自治館内に祀られる。

八坂神社の鳥居と奥には養老自治会館の建物



飯宝山長泉寺 (はんぼうさんちょうせんじ) 曹洞宗

所在地 市原市養老457番地

創建時期 不詳

本尊 聖観音

住職 伊藤 博陽

由緒・伝説 創建時期・由緒不詳

長泉寺の本堂正面





本堂の中には祭壇が飾られる



本堂を右側から写す



三面に地藏様を彫られた石碑

本資料は、次の資料を参考に作成しました。

- ・市原市埋蔵文化財センター遺跡ファイル
 - ・ちょっと便利帳（日本の元号・年代早見表）
 - ・全国遺跡報告総覧
 - ・日本の城郭・城址（千葉県版）
 - ・寺社にまつわる伝説（市原市 その2）
 - ・市原市・宗教法人一覧
 - ・市原の城郭と国府跡をたずねて
 - ・Wikipedia- 市原郡
 - ・市原市歴史と文化財シリーズ
 - ・いちはら歴史の旅人
- ・そのほかに、紹介した寺院・神社の関係者の方々の協力を頂きました。

加茂高滝地区の地名の由来と史跡と文化財

発行・編集 市原の歴史を知る会

住所 市原市能満1020番地1

連絡先 090-3545-1113